

中斎塾 北関東フォーラム 第5回講話

令和8年5月16日(土)

お早うございます。塚越さんのご挨拶は、いつもながら大変素晴らしいですね。特に、「素直にずっと続けていることが大切」という言葉が最後にビシッと締まったように感じました。

その言葉を聞いた瞬間に、先ほどお話した神藤さんを思い出しました。家庭菜園を28年間ずっと続けているそうです。同じ市役所の土地を使って家庭菜園をされているとのことですが、連作への対策はどうされているのかお聞きしたところ、「同じ面積の中でも、植える場所を変えればいいだけのことですよ」と教えて下さいました。言われてみればその通りなのですが、これも長年、素直に続けているからこそ、すっと答えが出てくるのだと思います。

家庭菜園についてどうしたらいいのだろうと思った時には、神藤さんにお聞きするのが良いと思います。そうすれば、知識もまた一つ増えていきますね。

素読に入る前に、一つ思い出したことがあります。前回北関東フォーラム後のランチミーティングですが、もう少し回数を増やしてもよいと思いました。なかなか難しいとは思いますが、ランチミーティングは皆さんの意見を聞くことができますし、お互いに話をする良い機会にもなりますので、大変有意義なものでした。

今後の予定としては、7月5日、靖国神社で奉納吟詠を行います。また、10月4日には明治神宮でも奉納吟詠を行います。こちらも長く続いている行事です。長い年月にわたって行事を続けていくことは、大変意義のある、素晴らしいことだと思います。

会社は、創業した初代から2代目、3代目と受け継がれ、長く続いていくほど素晴らしいものだと思います。長く続く会社には、次第にその会社ならではの文化や香りが生まれてくるように感じます。

私自身はシムックスの創業者ですから初代ですが、58歳の時に社長をバトンタッチしました。その後、2代目、3代目、4代目と続き、私が再び社長を務めることになったので、今は5代目ということになります。

個人でも、結婚生活が長く続けば銀婚式や金婚式などお祝いします。それだけ、長く続けることには価値があるのだと思います。

中斎塾も 20 周年記念が近づいてまいりました。できる限り長く続けていきたいと思いますので、これからどうぞ宜敷お願い致します。

では、素読にまいりましょう。本日は論語が 3 つ、私が読みますので、後に続いてお読み下さい。

(全員で素読)

有難うございます。今回の素読で、意識して少しゆったりと読んだところがあります。

「大なるかな」は大きなあという気持ちを込めて読みます。また、「巍巍乎たり（ぎぎこたり）」は、偉大で、そびえ立っている様子を表しています。読む前に改めて見直してみて、山が悠然とそびえ立つ姿を思い浮かべながら、「巍巍乎たり」と読みました。

「蕩蕩乎たり（とうとうこたり）」は、広々とした景色を、ゆったりとのんびり眺めているような気持ちで読みます。

「煥乎たり（かんこたり）」は、光り輝いているという意味ですので、光が広く輝いているような気持ちを込めて読みます。

もう一つ、「吾、日に三たび吾身を省みる」とありますが、「三たび」も少しゆったり読むとよいと思います。最後の「君子人」も、ゆっくり読みました。君子人かな、これは君子だな、という気持ちを込めています。

このように、素読をするときには、ただ読むだけではなく、自分が気持ちを込めて読みたいのはどこかを考えて読んでみるとよいと思います。

今、頭の中に中斎塾フォーラムでご縁が深かったものの、最近は参加されていない方が 2 人浮かびました。

お一人は福田さんです。福田さんには、最初の代表幹事を務めていただきました。中斎塾フォーラムのスタート時には、湯島聖堂に大勢の方が集まり、素読を行いました。その際、私が読んだように素読する役を福田さんをお願いしました。

その福田さんが、朝早く、渡良瀬川の河川敷で素読の練習をされています。

福田さんのもとには素読を習いに来る方もいて、その方々と時々、朝早く大きな声で論語を素読しているとの事です。私もたまたまその様子を見かけました。

つい最近、山田方谷研究会から、山田方谷祭の案内状が届きました。山田方谷先生にご縁のある方を招いて、講演やディスカッションを行うという内容でした。何気なく案内を読んでいると、そこに福田さんの名前があり、とても嬉しく思いました。

岡山には、税理士の方々が集まって山田方谷先生について学んでいる会があり、福田さんはその方々に論語の素読を教え続けているそうです。その税理士先生方の社員も、福田さんのところへ素読を習いに来ているということでした。福田さんが論語の素読を行い、その解説や講演もされるそうです。

中斎塾フォーラムで始めたご縁が、今もこうして続いていることを知り、続いていてよかった、呼んで戴いてよかったと、嬉しく思いました。

もう一人、頭に浮かんだのは須藤さんです。須藤明実さんは、これまでずっと中斎塾フォーラムに参加して下さっていて、現在はご自身で3つほど教室を持ち、論語を教えておられます。

先日、素読論語について書かれた小冊子を送って下さいました。読んでみると、その解釈が実に良いのです。論語をしっかりと読み込み、ご自身のものにされていることが伝わってきました。

学者の先生方が書かれるような解説ではなく、ご自身が感じたこと、考えたことを、ご自身の言葉で素直に書かれています。大変良い小冊子だと思います。ご覧になりたい方は、事務局に置いてありますので、ぜひご覧下さい。

この20年の間に、自分で教室を開き、人様に教える方が出てきたこと、それが実際に続いていることは、大変嬉しいことだと思います。

では、論語の解説に参ります。

- ① ^{そうし いわ}曾子 ^{われ ひ}曰く、^み吾 ^{わが み}日に三たび^{かえり}吾身を^{ひと}省^{ため}みる。人の^{はか}為に^{ちゅう}謀りて忠ならざるか。
^{ほう ゆう}朋友と^{まじわ}交りて^{しん}信ならざるか。^{なら}習わざるを^{つた}伝えしか。

(学而第一・4)

「三たび吾が身を省みる」

三たびとは、3回ではありません。「一、二、沢山」という意味で、何度も何度もということです。

曾子は、自分はそれほど優秀ではないと思っていたのでしょう。だからこそ、「私は何度も何度も自分自身を振り返り、反省しています」と言っているのだと思います。

3回だけ復習するということではなく、何かの折にふと思い出したら、そのたびに自分自身を振り返り、何度も繰り返し反省するということです。

「人の為に謀りて忠ならざるか」

人のために何かをしてあげようと思って行動した時、果たして心を込めていただろうか、と自分自身に問いかけている言葉です。

最近では、先日、正田さんのお別れの会がありました。しげる工業の名誉会長を務められた方です。

私は、人が亡くなられた時、最後にお別れをしたいと思った方には、どれだけ仕事が忙しくても、出来る限り予定を調整してお別れに伺うようにしています。

今回のお別れの会は、オープンハウスアリーナ太田という広い会場で行われました。会場には、故人のこれまでの人生を振り返る写真が並び、その上には会社の歴史も写真と共に紹介されていました。ご本人が年齢を重ねると並行して、会社がどのように発展してきたのかが分かるようになっていて、ゆっくりと写真を見ながらお別れすることが出来ました。

正面には、故人がゆったりと座っている写真が飾られていました。私の中には会社を立ち上げた頃の思い出が強く残っていますので、時々お会いする機会があると、その頃の話をする事があったのです。写真を見ながら、あの時はこうだったなぁと記憶が蘇りました。

今回は、そのような思い出を振り返りながら、心を込めてお別れすることができました。故人との思い出をゆっくり振り返ることができる、そうした工夫がされたお別れの会だったと思います。

川村さんの時は、お別れの会に出席できませんでしたが、どうしてもお別れをしたいと思い、小板橋さんをお願いしてご本人のところへ伺い、手を合わせました。その時、まるで眠っているかのような、とても穏やかで良いお顔をされていました。

正田さんの場合は、爽やかさを感じました。お別れの場でそのような感覚を持つことはめったにありません。それだけ会場全体に、故人を想う気持ちが満ちていたのではないかと思います。

「朋友と交りて信ならざるか。」

友人と約束をした時に、自分は約束をきちんと守っただろうか。破ってしまっていないだろうか、と時々振り返ってみることが大切という意味です。

「習わざるを伝えしか」

先生から教わったことを、自分自身できちんと理解し、納得したうえで弟子に伝えているだろうか、という問いかけです。これは「三たび吾身を省みる」に繋がります。

東京に「三省堂」という本屋さんがあります。この「三省堂」は論語から取ったものだと聞きました。本当にそうなのだろうかと思い、自分で確かめてみることにしました。

先ほど塚越さんのお話にもありましたが、知行合一です。知識として知っているだけではなく、実際の行動が伴っていないならないということです。

三省堂という名前は論語から取ったものと聞いただけで、そのまま人に伝えてしまえば、これは自分で確認していないので、又聞きになります。

そこで、実際に三省堂へ出かけて、役員の方々とお話をしました。関連する資料も見せて戴き、確かに三省堂という名前は『論語』から取ったものなのだと、自分自身で確認し、納得することができました。

自分で納得できたからこそ、私は皆さんに三省堂という名前は論語から取ったものだとお話しています。人から聞いたことをそのまま伝えるのではなく、自分で確かめ、理解し、納得したうえで伝える、その姿勢を大切にしています。

二つ目の論語にも同様の例があります。「煥乎たり、其の文章有ること」この煥乎（かんこ）という言葉を取って、前橋に「煥乎堂」という本屋さん

があります。

私も煥乎堂の名前は論語から取ったものだと、ある文章を読んで知りました。こちらにも、実際に煥乎堂へ出かけて行って、話を聞きました。

その時お話をして下さったのが、今年 90 才になられた方で、当時常務だった岡田芳保さんです。直接お話を伺い、確かに煥乎堂は論語から取った名前だと納得しました。岡田さんは 80 歳を過ぎてから特に絵に没頭されて、一年に一度、個展を開いています。

②子曰く、大なるかな、堯の君為るや。巍巍乎たり、唯天を大なりと為す。
唯堯之に則る。蕩蕩乎たり、民能く名づくること無し。巍巍乎たり、其の
成功有ること。煥乎たり、其の文章有ること。

(泰伯第八・19)

「子曰く、大なるかな。」

ここでいう「大なるかな」は、実に大きい、スケールが大きく偉大だ、という感嘆の言葉です。

「堯の君為るや。巍巍乎たり」

堯は、古代中国の帝王です。堯が君主として国を治めている姿は、実に立派だという、堯帝に対する賛辞です。

巍巍乎たりは、そびえ立つように立派という意味です。堯帝の姿や業績が、それほど素晴らしいということです。

「唯天を大なりと為す。唯堯之に則る。蕩蕩乎たり、民能く名づくること無し。」

天より大きなものはない。堯帝のみ天の徳に等しい。堯帝の徳や政治は余りに広大であり、国民はその素晴らしさを言葉で表せないほどだった、という意味です。

「巍巍乎たり、其の成功有ること。煥乎たり、其の文章有ること」

成功とは、堯帝が君主として国を立派に治めた素晴らしい成果であり、それが光り輝いているということです。

堯の政治は偉大なだけでなく、国家のルールや文化（礼楽制度）の面でも、完璧に美しく整備されていたことを称えています。

これは会社でも同じで、本当に素晴らしい会社になった、教室であれば立派な教室になった、というように、作り上げた成果や業績が素晴らしく、光り輝いているということです。

ただし、「煥乎たり」は、人為的に作り出そうとすると、かえってわざとらしくなります。以前テレビで、習近平とトランプ大統領が赤い絨毯の上を並んで歩き、中国の子どもたちが万歳しながら一斉に歓声を上げている場面を見ました。「煥乎たり」を演出しているのだと思いますが、やはりわざとらしく感じました。

煥乎たりとは、普通に「万歳」と声を上げるだけではなく、思わず飛び上がってしまうような、自然に喜びが溢れ出る状態になれば良いということです。

③曾^{そうし}子^{いわ}曰く、以て六尺^{もつ}の孤^{りくせき}を託^こすべく、以て百^{もつ}里^{ひゃくり}の命^{めい}を寄^よすべく、大^{たい}節^{せつ}に臨^{のぞ}みて奪^{うば}うべからざるは、君^{くん}子^し人^{じん}か、君^{くん}子^し人^{じん}なり。

（泰伯第八・6）

これは、幼い子どもを安心して託すことができ、国の重要な仕事も任せることができ、重大な場面に立っても、その志を失わない人こそ君子であるという意味です。

渋澤栄一は、この章句を見るたびに、ある種の感慨を覚えると語っています。六尺の孤とは、父親を亡くした幼い孤児のことです。1尺23センチで考えると、六尺で1メートル38センチ、15歳くらいの少年を指すと考えられています。

渋澤栄一が六尺の孤を思い出したのは、徳川慶喜の弟、徳川昭武との出来事があったからです。当時、フランスでパリ万国博覧会が開かれることになり、日本からも代表者を出すことになりました。慶喜自身は行くことができなかった為、弟の昭武を代理として派遣しました。渋澤栄一もその一行に加わりました。

ところが、その後、慶喜が大政奉還をしたので、一行の多くが日本へ呼び

戻されることになりました。最後に残ったのが渋澤栄一でした。

渋澤栄一は、自分が六尺の孤を託されたのだと考えました。当時、昭武は15歳です。その昭武を自分がしっかり支え、将軍の名代として役目を果たせるようにすると共に、十分に勉強も出来るよう、一生懸命面倒を見ました。

後になって渋澤栄一は、自分なりによくやったと振り返り、その経験を「六尺の孤を託され、それを全うした」と思い出したのです。ですから、渋澤栄一にとって六尺の孤は、自分自身の人生の経験と重なる、大切な言葉でした。

「百里の命」

四方が百里ある大国で、君主に委任され政治を司ることです。

「大節に臨みて奪うべからず」

大きな事件や困難なことが起きた時でも、自分の考え方や志を失ってはいけない、という意味です。

先日、寝る前に家内が見ていたテレビで、タイタニック号の事故を生き延びた看護師の話を見ました。その看護師は、以前船の事故で、沈没する前に食べ物を食べておいたことで助かった経験がありました。その経験から、タイタニック号が沈没する時、周りの人たちにも必死に食べさせたそうです。

さらに、その後も別の沈没事故に遭いましたが、それまでの経験を生かして、三度とも生き延びたということです。

私自身も、山崎先生に棒術を教わっているとお腹が空いてしまいますので、出かける前におにぎりを持ってきて、合間に少し食べています。これも、大変な時には何か栄養を補給しておく、という私なりの実践です。

もう一つ、余分な話をさせていただきます。ある料亭で、常連のお客さんが、その日は何も食べなかったそうです。それを見た女将さんが心配して、玄関までお見送りをしました。

その際女将さんはチョコレートを取り出して、「何があるか分かりませんから、これを口に入れて、何か少しでもお腹に入れておいて下さい」と渡したそうです。

お客さんは言われた通り、チョコレートを食べて店を出ました。すると、しばらくして脳梗塞か何かで倒れ、救急車で運ばれました。もしお腹の中が

完全に空っぽだったら、助かっていなかったとのことでした。チョコレートを食べていたことで、それが蘇生のきっかけになったという話です。

この話を聞いて、私は空腹で何か行っではいけないと考えるようになりました。

3.11のような大きな災害が起きた時には、チョコレートを口に入れてから逃げるくらいのことと考えておいた方がいいのではないかと。そこまで書いてあるわけではありませんが、私はそんな解釈も致しました。

「君子人か、君子人なり」

堯帝は天のあり方に従って国を治めている。これこそ君子ではないかと自分に問いかけ、「そうだ、堯帝は君子である」と納得しました。

以上で、論語の解説と致します。

東京フォーラムに最近入会された森裕子さんという、80代で現在も現役の女性社長がいらっしゃいます。清水先生のご紹介で入会され、熱心に参加されています。

東京フォーラムでは、指名された人が、自分で読みたい章句を探してきます。森さんが選んだのが「六尺の孤」でした。それを選ばれたことに、感心致しました。

〈恒例の質問〉

恒例の質問ですが、テーマを決めてからそろそろ半年が経ちますので、これまで掲載していた説明も新しく変更しようと考えております。それでは、恒例の質問に参ります。

- 良い日が今年は続いておられる方
- 嘘はつかれなかったし、嘘もついていないという方
- 有難うと言い続けているし、有難うと言われ続けている方
- 身体の手入れをよくやっていると思う方
- 自分磨きをよくやっていると思う方
- 昨晚寝るとき、満足感を持って寝た方

何度も申し上げていますが、良い日が続いているか、悪い日が続いているかというのは、あくまで直感です。良いことがこれだけあったから、今日は良い日だったと客観的に数えるのではなく、なんとなく良い日が続いているなと感じたら、すっと手が上がる。それでいいのです。

なぜこのようにするのかというと、「総合的直感力」を養うためです。この言葉は、私の師匠である木内信胤先生から教えて戴きました。

直感とは、理屈ではなく、パッと頭に浮かんだり、ふっと感じたりするもので、いわゆる第六感です。そこに総合的という言葉をつけるのは、縦の学問と横の学問、つまり一つのことを深く学ぶことと、幅広く学ぶことの両方が身に付くからです。

そういう人が直感的に何かを感じた時、それは単なる第六感ではなく、これまで身につけてきた知識や経験が総合的に働いたものです。木内先生はそれを「総合的直感力」と呼んでいます。

私は先生のお話をできるだけ全部書き留めたいと思い、録音するだけでなく、自分の耳で聞いて、懸命に書き取りました。それを続けているうちに、3年ほどで、先生のお話を殆ど書き取れるようになりました。

速記を習ったわけではありません。先生の話し方やよく使われる言葉を覚えながら、自然と全体が書き留められるようになったのです。そうして残した記録は、段ボール一箱が埋まる程になりました。

木内先生がお亡くなりになった後、その中から、私が直接聞き、直接質問してやり取りし、これは良いと思う言葉を中心に選び、「木内信胤語録」を作りました。それを関係する方々にお渡し、皆さんから大変役に立つと言って戴きました。

ある方にどうやって読んでいるか聞いたところ、トイレに置いているとのことでした。ほんの僅かな時間でも、読むと心に突き刺さるものがあるそうで、木内先生の語録はトイレで読むに限りますとまで言われました。

したがって、良いと思う本は、トイレで読むことをおすすめします。本をトイレで読むのがいいのですかと思われるかもしれませんが、これには昔からの考え方があります。

しじょうあんじょう
厠上鞍上にて読む、という言葉があります。厠上はトイレの中、鞍上は馬の上です。馬に乗って走り回るのではなく、ゆっくり馬に揺られている時や、

トイレで過ごすひとときは、静かにものを考えたり、良い本を読んだりするには絶好のタイミングだという意味です。

渋澤栄一も「三たび吾身を省みる」を実践していたという話があります。渋澤栄一は、夜寝る前に一日の出来事を振り返っていたそうです。

私もなかなか物を覚えられる方ではないので、夜寝る前に今日一日、何があったかを思い出す習慣をつけています。誰と会って、何を話したのか。そして、誰かと何か約束をしていなかったか。そうしたことを一つ一つ思い出して、だいたい思い出したなと思ったところで眠ります。

この習慣について、渋澤栄一の言行省察、渋澤老人の記憶術として紹介しています。

これはとても良い習慣なので、ぜひお勧めします。私も実践していて、今では夜寝る前に目を閉じた瞬間、今日は何をしたか、誰に会ったか、何か約束をしたかと自然に思い出すようになりました。

ある程度思い出せたと思ったら、そのまま寝ます。明日やらなければいけないことや、誰かに伝えなければいけないことを思い出したら、忘れないように小さなノートにメモします。

先日、小島さんに会った時、「昨日はすみませんでした」と伝えました。あとで手帳を見ると、「小島さんに会ったら、昨日はごめんねと伝える。それから、そら豆がおいしかったと伝える」と書いてありました。忘れそうだったので、前の晩にメモしておいたのです。

また、田島先生に「昨日届いた手紙を渡して見てもらう」というメモも残っていました。今朝それを見つけて、すぐに田島先生に手紙を見ていただきました。

夜寝る前に一日を振り返り、何か思い出したことがあればメモしておく。そうすると、そのことが頭にしっかり残り、翌日もすぐに行動できます。これは私自身が実際にやってみて感じたことです。ぜひ、皆さんにも習慣にして戴きたいと思います。

寝る前に振り返ってメモすることが難しいという方には、力道山流メモの残し方もよいでしょう。力道山は、亡くなられてからかなり経ちますが、今でもその名前が残っています。

風呂場や廊下、居間など、家のあちこちに鉛筆と紙を用意して、ぶら下げていたそうです。移動中に何か思いついたら、その場所にある紙にすぐメモするのです。そうやって思いついたことをその場その場で書き留めることを繰り返しながら、実業家としての仕事にも取り組んでいたそうです。

恒例の質問の中で、なぜこのようなことを申し上げたかという、考えながらゆっくり手を挙げる方もおられます。瞬間的にパッと手が上がるのであれば、総合的直感力が少しずつ身についてきていると考えてよいと思います。

あれこれ考えてからゆっくり手を挙げるのであれば、まだ直感力を磨いている途中なのかもしれません。できるだけ考えすぎず、直感でスッと手を挙げられるようになるといいですね。今日は、そんなことをお伝えしたくてお話しました。

恒例の質問はこれで終わります。ここからは、現代の話を少ししたいと思います。

最近、私が氣になっているのは、高市早苗総理大臣が「働いて、働いて」と言っていたことです。実際に、大臣たちがゴールデンウィークに各地を回り、精力的に仕事していたことは目に見えて分かります。

最近では 36 協定の特別条項についても、少し氣になる動きがあります。36 協定で特別条項を結んでいる場合、一定の条件のもとで、通常の上限を超えて時間外労働をさせることができます。現在の制度では、時間外労働は月 100 時間未満、年間 720 時間以内などの上限が設けられています。

会社としてももう少し残業をしてもらいたい、働く側も、もう少し働きたいという場合には、労使で話し合い、必要な手続きをしたうえで、一定の範囲内で労働時間を延ばすことが出来るということです。最近、このようなもう少し働いてもよいのではないか、という声が大きくなってきているように感じています。

帝国データバンクの調査では、東京都内の企業約 3,800 社を対象にアンケートを行い、そのうち約 2,000 社、62%が回答したそうです。その結果、4 年連続で賃上げをしてきた企業の中には、来年も賃上げする予定と答えた企業が多くありました。

政府としても、企業に賃上げを促す流れをつくっていますし、民間企業の側でも賃上げがどんどん進んでいます。この勢いが続けば、賃上げをしない

のは良くないという考え方が、これからますます広がっていくのではないかと感じています。

もう一つ氣になっているのは、世界の話でいうと、地痞（ちひ）文化という言葉があります。

「地」は大地の地。「痞」は病だれに否と書き、ならず者という意味があります。中国には、こうした地痞文化があると、石平氏が出版した本の中で述べています。

今回、トランプ大統領と習近平国家主席が会談しました。その様子を見ると、私は習近平氏の方が、はるかにハッタリが上手だと感じました。

アメリカはならずもの国家になったということを前に申し上げましたが、中国はならずもの国家が当たり前であり、ならずもの文化として根付いていると感じます。

中国の歴史を見ると、権力を握る為に恫喝、騙し、嘘、と様々な策略を使うことが繰り返されています。権力を握った人物も、理想的な君主として統治するのではなく、策略によって政権を維持します。

また今度は別の人物が足をすくい、次の権力者になります。その繰り返しが中国の歴史にあり、地痞文化は中国の基本的なものの考え方を表した言葉になっているという話です。

地痞文化を前提に考えると、習近平氏がこの間行った逆クーデターについても理解しやすくなります。

中国では、軍を押さえている人物が強い立場にあります。習近平氏の場合も、軍の中に右腕・左腕ともいえる有力者がいました。軍幹部たちには汚職が蔓延しており、習近平氏が汚職の粛清を始めると、次は自分が切られるのではないかと皆警戒するようになりました。

習近平氏は、自分に直結する部隊を使い、軍を実質的に握っていた有力者2人とその一派を拘束し、北京郊外の幹部用の施設に収容したとされています。軍の関係者はそれを見て震え上がったわけです。これは、かつて毛沢東がライバルを粛清するために、自分を支持する勢力を作り上げ、権力を固めていった構図とも重なります。

そうした動きが起きつつあると感じた習近平氏は、軍に逆クーデターを行い、軍を再び自分の支配下に置こうとしました。それは一応成功したよ

うに見えますが、実際は非常に危うい状況です。権力基盤を固めたように見えても、習近平自身が綱渡りのような、不安定な立場にあります。

以前から、中国はいずれ解体され、連邦制度のような形になるのではないかと言われてきましたが、今回の状況を見ると、それが早まる可能性もあるのではないかと感じています。

今回のトランプ大統領と習近平氏の会談を見ると、どちらがより危うい状況にあるのか。客観的に見れば、習近平氏の方が危なっかしいのではないかと思います。トランプ大統領は、少なくともすぐに大統領の座を失うわけではありません。一方、習近平氏は国内での権力基盤そのものが揺らぐ可能性があります。

今回の会談では、お互いに強い姿勢を見せながらも、トランプ大統領はあえて多くを語らず、習近平氏からの発言にも強く反応しませんでした。そのため、表面的には「中国の判定勝ち」という印象が世界に広がったように思います。

しかし、両者とも相手の置かれている状況がある程度理解しているからこそ、今回は正面衝突を避けたとも考えられます。見た目は中国の判定勝ちでも、長期的に見れば本当にそうなのか、これから様々な評論が出てくるでしょう。

私が最後に申し上げたいのは、今後、世界の火種がいつ大きな衝突に繋がるのかということです。私は、今年中に第三次世界大戦のような大規模な戦争が起きる可能性は低いと考えています。しかし来年以降、本格的な衝突が始まる可能性はあるのではないかと考えています。

現在、ロシアとウクライナの戦争、ホルムズ海峡をめぐる緊張、そしてインドとパキスタンの問題など、世界には様々な火種があります。すでに導火線には火がついていて、今年それが燃え広がり、来年には大きな爆発につながる可能性もあります。

今回のトランプ大統領と習近平氏の会談からも、そうした世界情勢の緊張が垣間見えたように感じています。

これから世界で何が起きるのか。それが自分の仕事や人生にどのように関わってくるのか。そういう視点を持って、今後の世界情勢を見ていくことが大切だと思います。本日は以上です。有難うございました。

